

## すばらしい朝のために

鈴江俊郎

くるみざわ作品は圧倒的だ。「故郷を守りたい」という皮肉なことばが重さを通り越して、笑える。時の経過に従って男三人の社会的なステータスは転落、栄達、その逆転、変動が極端で、テンポがいい。郷里の自然破壊に寄与すればするほど、良識と反比例していればいるほど社会では栄達を得られる現象は世間のあちこちで見られる。その把握が正確で、しかも明快、読んでいて心地よいのがなによりすばらしい。告発の強さもすばらしい。端々に説明的なところは感じるが、そのまずさを上回る魅力が全編にある。要するに戯曲はおもしろいかどうか、だ。そこをクリアしたことを祝福したい。

「根っこを抜いてみたら悪いところがわかる」など上手に喋りすぎと感じなくはないけれど、ただ反原発か当局追従かの次元ではなく、人生のしのぎ方の次元までを含んでいるセリフになっている点が、この戯曲にアジテーション演劇を超えさせたのだろう。

劇画調といってもいいようなタッチだとは言え、精度の甘い詳細はある。威力を発揮することになっている怪文書に迫力が乏しい。敗者である元社員・中本の妻子は逃げたのではなく、一緒に生きるしかなかった、としたほうが不幸のありさまはリアルで抵抗しようのなさが増すのではないか？などと勝手に考えた。不安定になった母のもと、子供が不登校になり、あるいは一生続く心の不具合を……とか。いや書きすぎると焦点はボケる。でも単純化しすぎるとリアリティは薄くなる。私はその出し入れの微調整にもっと精力を注いでもよいじゃないか、と望みたくなった。

しかし特に最終盤は一気に読めた。三人のだれも勝利していない。そして、読者の脳内で、社会全体が勝利していないことも痛感させられる。この大きく広がる構想に圧倒されたのは間違いない。

佳作の山本作品の詩句のような会話。「野お母さん」は待っている。「竹やぶ」が別の世界へ旅立つから、待っていればいいと百年前に言われたから宇宙の秘密を飲んで、待っている。この宇宙からさらに先の宇宙に行く大きな実験が始まっているのだ。——そういう数億年の物語の中に我々がいる、というような世界を想定している。その世界に共鳴したとしたら、その作家の気分は、うつろでむなしさ満点の味気なさの究極にいるさみしいものだと想像できて、切ない。そして生活のあくせくした物事を小さく見せる次元に連れていかれるのは爽快でもある。しかし、その世界に共鳴するには叙述の腕前が足りない。特に最終盤、なにが書かれているか、なんのために人物が何をしているのか、もはや私にはつかめなかった。きちんと書かれていない、と感じた。具体的に、読者を説得してほしい。なんとなくの、茫漠とした設定の中で、それらしい会話がされているのだろうな、とだいぶ大甘にこちらの想像でいいように補ってあげて、それで初めて成り立つ感動だ、と点を辛くしたのは事実だ。けれどその上で、私は、この大甘な想像で補ってあげてもいい、とも感じた。この甘美な悲しい別れの感情に酔って涙をはらはら流す浄化される経験を持ちたい、そういう魅力はある。

ト書きとして意味のない書き込みを禁欲することを勧めたい。書いたつもりになり、役者になにか伝えた気分になりやすいだろう。修業はどうしても甘くなるだろう。ト書きとセリフという限られた手段だけで、他人にきっちりと構築物を手渡しているのか、と厳しくなっ  
てほしい。

すばらしい上演がこの世に出現するというのは、かえがたい宝だと思う。それはめったなことでは出現しない奇跡だと知っているから、書く私たちは鍛え、削り、祈り、朝を迎えることにあきないのだと思う。

この賞の選考に関わった15年間に感謝したい。そんな朝を想像させる若い同志たちと毎年出会えた幸福は小さくなかった。世界を宝で満たすために、劇作家たちよ、これからもがんばろうじゃないか。